

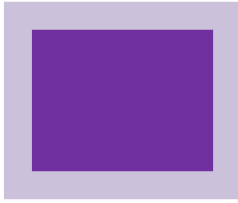


# 小倉城周辺魅力向上事業 基本計画

北九州 小倉ならではの歴史的・文化的な資源を活用した  
集客力や回遊性のある観光・文化の名所づくり



平成 28 年 2 月  
北九州市



# 目 次

---

<b>I .はじめに</b> .....	<b>1</b>
<b>II .小倉城周辺エリアの現状と課題</b> .....	<b>5</b>
1.小倉城周辺エリアの現状 .....	5
2.小倉城周辺エリアにおける課題 .....	12
<b>III .小倉城周辺魅力向上事業 基本計画の考え方</b> .....	<b>13</b>
1.事業の目的とテーマ .....	13
2.ターゲットの視点 .....	14
3.事業の方向性・方針 .....	15
4.エリア内のゾーンの考え方について .....	16
<b>IV .取り組む事業の内容</b> .....	<b>17</b>
1.取り組む事業の項目 .....	17
2.各事業の方針 .....	18
3.検討事業図 .....	24
4.検討事業の内容 .....	25
<b>資料</b> .....	<b>28</b>

# I.はじめに

## 小倉のなりたち

### 江戸時代：城下町としての小倉

「小倉」という地名が歴史の文献に登場するのは、<sup>ほんしやう</sup>梵鐘（釣鐘）をつくる<sup>こくらつ</sup>小倉鋳物師の町として、また「<sup>こくらつ</sup>小倉津（現在の室町一帯）」と呼ばれる港湾都市として栄えていた中世の頃のことです。この小倉津に1569年（永禄12年）、筑前立花城攻めに際し、山口毛利軍勢が<sup>ひらしろ</sup>平城を構えたと伝えられています。



小倉城下町の賑わい(小倉城天守閣1階ジオラマ展示)

小倉は本州と九州を結ぶ交通の要衝であり、江戸時代になると九州各地と江戸を結ぶ九州五街道の起点となり、「九州のすべての道は小倉に通じる」と言われたほどの「ひと」、「もの」の往来の盛んな場所でした。

中でも長崎街道は長崎から西洋の文化や新しい技術などを日本に伝える文明の道として重要な役割を果たしていました。

城下町としての小倉の歴史は、<sup>ほそかわただおき</sup>細川忠興が1602年（慶長7年）に小倉に居を移し、40万石にふさわしい唐造りと呼ばれる全国唯一の城である小倉城の築城を開始したことから始まりました。また、忠興は、城下町繁栄策として、諸国の職人を集めて商人や商工業保全策を実施しました。外国貿易も盛んに行われ、小倉城を中心として、たくさんの物産・人・情報が集まり、大変にぎやかな城下町となりました。

#### 宮本武蔵と小倉とのつながり

1612年（慶長17年）4月13日、宮本武蔵は小倉藩の剣術師範であった佐々木小次郎と巖流島で決闘したと伝えられています。

その後、武蔵は、1632年（寛永9年）小笠原忠真に仕えていた養子の宮本伊織と共に小倉に移り住みました。そして、その生涯で最も長い8年間を過ごしたといわれています。

この時期には、小笠原長次の後見人として島原の乱に出陣し、戦場の最前線で戦ったことを伝える史料が残っています。



手向山の小倉碑文



400周年を迎える小倉祇園太鼓

1619年（元和3年）、無病息災を祈るとともに、城下町繁栄策のひとつとして、京都の祇園祭を取り入れた「小倉祇園太鼓」が始まりました。

当時の城下町の名残は、魚町や米町、馬借などの地名に残されています。現在の小倉城天守閣は、昭和34年に再建されたものですが、周辺の石垣は江戸時代の姿そのままに残され、築城の過程や殿様の入城路など、当時の小倉の風景をうかがい知ることができます。

1632年（寛永9年）には、將軍徳川家光から九州諸大名監視という特命を受けた譜代大名の<sup>おがさわらただまね</sup>小笠原忠真が、小倉城に入城しました。この頃の小倉城は全国の城でも珍しく、「桜の城」であったとの記述があります。当時、桜は戦の際に薪として使用できたため城に植えることが許されておらず、多くの城では松しか植えられていませんでした。このことは、幕府から九州探題としての役割を持った小倉藩が特別な立場であったことを物語っています。



小倉城の桜

また、小笠原藩初代城主、忠真は、ぬか漬けが盛んな信州松本を統治していたこともあり、ぬか漬けを大変好んでいました。小倉城入城の際にも、ぬか床を持ち込み、城下の人々にもぬか漬けを奨励し、小倉にぬか漬けを根付かせました。

以後、234年間にわたって城主を務めた小笠原家は、全国の小笠原一族の総領家で、「小笠原流礼法」の宗家として知られる旗本の小笠原家もその一族でした。小笠原流礼法は、弓術や馬術と深く結びついた武家の礼法であり、「思いやりの心」と「もてなしの心」を大切にする日本の伝統的な美の文化として今に伝えられています。

小笠原藩主時代には、泉水のある回遊式庭園を持つ小笠原氏の別邸、下屋敷が築造されました。この庭園周辺は、現在「小笠原流礼法」を伝える体験型文化施設「小倉城庭園(愛称：小笠原会館)」として復元されています。



小笠原流の弓儀式



加冠の儀（小倉城庭園）

## 近代：軍都としての小倉

明治維新を迎えると、鉄道の発展とともに、小倉は、北九州から山口にかけての広域商業の拠点となりました。一方で、工場の立地とともに、本州と九州を結ぶ交通の要衝であったことから、廃藩置県にそなえて鎮台(軍隊)が設置され、さらに歩兵第十四連隊の発足が続くなど、次第に軍都としての性格を帯びるようになりました。

明治10年の西南戦争の際には、小倉城内に駐屯していた歩兵第十四連隊が、乃木将軍に率いられて出征した歴史もあります。その後は、歩兵第十二旅団や第十二師団の司令部が城内に置られました。城内には、野戦重砲や第十二師団司令部正門跡(師団の軍医部長を務めた森鷗外もこの門を通過して登庁)など、軍都当時の名残が史跡として残されています。

また昭和8年には、現在の勝山公園周辺一帯に陸軍造兵廠小倉工<sup>りくぐんぞうへいしやうこうらこうじやう</sup>廠が開設されました。その後、昭和15年に陸軍造兵廠が、陸軍兵器本部に改組されたことに伴い、小倉陸軍造兵廠と改称されました。

小倉陸軍造兵廠は、昭和20年8月9日の原子爆弾投下の際には、第一投下目標とされましたが、視界不良のため上空から造兵廠が確認できず、原子爆弾は第二投下目標であった長崎に投下されました。現在勝山公園の中には原爆犠牲者を慰霊し、平和を祈念するため、原爆犠牲者慰霊平和祈念碑などが建立されています。



第十二師団司令部正門跡  
～「坂の上の雲」ゆかりの地



昭和32年当時の小倉城付近空撮



原爆犠牲者慰霊平和祈念碑・長崎の鐘

### 乃木希典の居住地跡(リバーウォーク北九州横)

乃木希典が歩兵第十四連隊長心得として着任した明治8年12月19日から、明治10年2月13日、西郷軍との西南戦争に出動するまで住んでいた住居の跡に碑が建てられています。



## 現代：多様な機能が集約した小倉

明治時代、1901年（明治34年）の官営八幡製鐵所の創業を契機に、北九州市は、鉄と石炭の重工業都市として発展してきました。一方で、一時は公害のまちとして、空や川といった自然環境が悪化した時代もありました。

小倉城の内堀として利用されていた紫川も、著しく水質が悪化していましたが、下水道整備の進展や、1990年に始まった「紫川マイタウン・マイリバー整備事業」により、以前の美しさを取り戻すことができました。

「紫川マイタウン・マイリバー整備事業」では、周辺市街地や、小倉城を含む勝山公園と一体的な整備を進め、シンボル公園として、多様なイベントが開催できる「大芝生広場」や、「水上ステージ」「カヌー艇庫」「河畔遊歩道」といった、水辺に親しむことができる施設が整備されました。今では、勝山公園大芝生広場を中心として、水と緑の新たなオアシス空間が創出され、年間を通じて数多くのイベントが開催されるとともに、にぎわいあふれる都市空間として、市民の憩いの場となっています。



加イベント「100万人のカヌー体験」の様子

小倉都心地区は、江戸時代から「ひと」「もの」の往来の場所として栄え、現在でも市役所等の行政サービス施設や、文化施設、医療福祉施設など多様な都市施設が集積しています。

さらに、JR小倉駅を中心に新幹線、鹿児島本線、日豊本線、日田彦山線が連絡し、さらに、モノレール及びバス等の利便性も高く、北九州市の玄関口として公共交通の結節機能が充実しています。



JR小倉駅と北九州モノレール

また、小倉都心には、明治時代からの歴史をもつ魚町、京町などの商店街があります。

魚町商店街は、日本で初めて公道にかかる全長130mのアーケードが架かった銀天街発祥の地として有名です。

さらに、魚町銀天街の南側には、“北九州の台所”と呼ばれる巨過市場があります。市場には、鮮魚店や青果店、惣菜店など、約120店の店舗が肩を並べ、レトロ感と活気あふれる市場として市民に親しまれています。



「北九州の台所」巨過市場

市場の入口付近にあるスーパー「丸和」は、日本で初めて24時間営業を始めたスーパーマーケットとして有名です。

その他、城下町の歴史を今に伝える小倉城の周辺には、小倉城庭園のほか、中央図書館、文学館、松本清張記念館などの文化施設が存在し、さらに複合商業施設リバーウォークは、商業施設を中心として、文化施設、情報発信施設、大学など多様な機能が集約した小倉都心のシンボリックな拠点施設となっています。



リバーウォーク北九州

この様に、小倉城周辺エリアは、自然、歴史や文化、商業・教育などの多様な施設が集積し、都市機能が充実した、北九州市の中心部としてにぎわいのある場所となっています。

## 小倉と文学者とのつながり

近代日本の礎を築いた北九州市は独自の文化を育み、この地ならではの多彩な文学土壌を生成しました。

中でも、小倉にゆかりのある文学者は多く、軍医として小倉に赴任した文豪森鷗外をはじめ、日本を代表する社会派推理作家の松本清張、小説家の劉寒吉、岩下俊作、また、俳人の杉田久女、橋本多佳子、横山白虹などがその代表です。

小倉城周辺には、松本清張の人物像や作品などを紹介する松本清張記念館や、北九州文芸のあゆみと北九州ゆかりの文学者、文学作品に描かれた北九州を紹介する北九州市立文学館があり、北九州の豊かな文化の土壌を紹介し、未来へと受け継いでいます。

### 小倉とつながりの深い文学者

**森 鷗外 (もり おうがい)** … 1862-1922 小説家。

1899 (明治 32) 年6月から2年 10 か月、第十二師団軍医部長として小倉で勤務。のち、陸軍軍医総監、帝室博物館長に。小倉時代のことは『鶏』『独身』『二人の友』に描かれる。代表作に『舞姫』『雁』『阿部一族』『高瀬舟』『渋江抽斎』など。



文京区立森鷗外記念館所蔵

**松本 清張 (まつもとせいちょう)** … 1909-1992 小説家。

小倉生まれ。「或る『小倉日記』伝」で第 28 回芥川賞受賞。社会派推理小説という新分野を開拓し、古代史、現代史などの分野においても独自の世界を構築した。

『点と線』『ゼロの焦点』『日本の黒い霧』『砂の器』『昭和史発掘』など。



写真提供  
北九州市立松本清張記念館

**劉 寒吉 (りゅう かんきち)** … 1906-1986 小説家。

小倉生まれ。森鷗外旧居の保存や火野葦平らの文学碑の建立など、地域の文化全般にわたり優れた功績があった。郷土にまつわる歴史や人物を描いた『山河の賦』『黒田騒動』など。



**岩下 俊作 (いわした しゅんさく)** … 1906-1980 小説家。

小倉生まれ。初の小説である直木賞候補作品『富島松五郎伝』が、『無法松の一生』として映画化される。八幡製鐵所に勤務の傍ら「創作研究会」を作り、若手の指導を行った。推理小説、歴史小説などジャンルは多岐にわたる。『辰次と由松』『西域記』など。



**杉田 久女 (すぎた ひさじょ)** … 1890-1946 俳人。

1909 (明治 42) 年、旧制小倉中学校の図画教諭杉田宇内と結婚し、小倉に転居。以後亡くなるまで住む。17 年、「ホトトギス」に投句が初掲載されたのをきっかけに、女性俳句の草分け的存在として活躍。その句は高浜虚子から「清艶高華 [せいえんこうか]」と評される。52 年『杉田久女句集』。



**橋本 多佳子 (はしもと たかこ)** … 1899-1963 俳人。

橋本豊次郎と結婚後、1920 (大正 9) 年、小倉市中原に櫛山荘新築。22 年、高浜虚子を迎えての句会を契機に杉田久女から俳句の手ほどきを受ける。戦後の代表的俳人として活躍した。句集『海燕』『信濃』『紅糸』など。

